令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　　)内の数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
学力向上×ＩＣＴ活用	Chromebookを活用した学習活動や家庭学習を積極的に進める。 ２・３年生数学科で習熟度別学習を実施し、学習意欲の向上と学習の定着を図る。	分かり易く授業を工夫してくれているとする生徒の割合	＊46.2% (93.8%)	＊45.2% (93.7%)	＊50.8% (93.9%)	＊+5.6% (+0.2%)
	学力向上にかかわり「読む、書く力」を高める授業改善に取り組む。 めあてと振り返りの質的向上及び協働的な学びに向けた授業形態の工夫に全教科で取り組む。	授業の工夫、改善を組織的に行っているとする教師の割合	＊61.2% (100%)	＊61.5 % (98.1%)	＊58.1% (100%)	＊-3.4% (+1.9%)

主な取組及び成果と課題

○ 今年度も校内研究主題を「Heartful 神中　～安心できる学校、夢中になれる授業を目指して～」と設定し、３か年計画の２年目として研修を進めた。今年度は「Helpful　～つながり、支え合う～」をテーマとし、生徒同士のつながりや生徒と教師、生徒と授業内容のつながりを重点に置いた研修を行った。その結果、「学校に行くのは楽しい」と回答した生徒の割合が87.4%（前年度比＋3.0）、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒の割合が94.6%（前年度比＋2.2）、「困ったことがあれば、学校の先生に相談できる」と回答した生徒の割合が82.8%（前年度比＋3.9）と、生徒同士や生徒と教師のつながりが良好であることがわかった。また、「学校の先生は、自分たちにわかりやすく授業を工夫してくれる」と回答した生徒の割合が93.8%（昨年度比＋0.1）となり、若干ではあるが生徒が授業内容とつながりがでてきている。
○ 6月7日（金）に数学（第1学年）、社会（第2学年）、理科（第3学年）で、「Helpfulな授業づくりの工夫」を討議の柱の一つに据え、前期公開授業を実施した。ICTを活用しながら生徒同士をつなぐ授業を工夫して行った。
○ ICTの効果的な活用について研究を進め、第１学年体育科の２学期期末テストにおいて、Googleフォームで解答させる方式を採った。

■「１時間の授業の中で、今何をしているかわからなくなることがよくある」と回答した生徒の割合が46.6%（前年度比＋1.1）と２年連続で下降しているが、めあての提示や振り返り活動が生徒に浸透していることから、さらなる授業改善を引き続き行っていく必要がある。
■ 全国学力・学習状況調査の結果から、全国との学力差が大きく（国語－5.1、数学－5.5）、特に国語の情報をつなげて論理的に書くこと等に課題がみられる。
■ 読書時間、学校図書館の一人あたりの平均年間貸し出し冊数について、全国との差が非常に大きく、学校図書館の活用について改善が必要である。

学校関係者評価

・全国との学力差はあまり気にすることではと思う。ただ学力を上げる要因になるのが読書であるように感じる。文章理解には家庭学習としてたくさんの本を読むことだと考える。
・教師研修の成果として、学校が楽しく、教師との距離感が近くなったと感じる生徒が増えたと思う。
　全国学力テスト平均点との差は小さいほうが良いが、それぞれの学校・地域・取り組み方によって差は出ると思う。
　読みとる力を養うため、調べ学習や新聞活用を導入してもよいのではと思う。
・「安心できる学校、夢中になれる授業を目指して」を目標とした研修等が行われており、生徒の回答状況から生徒同士や生徒と教師の関係が良好に進んでいることが伺え、評価するところである。このことが学力向上につながるよう期待します。

今後の改善点

来年度、本校教員で取り組む校内研修において、昨年度までに育んだ仲間との関係を生かして、自分の考えを深めたり高めたりすることができるような取組を進める計画である。家庭学習の習慣化、ICTの積極的活用などにも取り組んでいく。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　　)内の数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

長期欠席対策

活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
教育相談部会で個別の支援方策を検討するとともに緊密な情報共有を行う。 登校対策教育支援員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、医療機関等と定期的に情報共有を行う。	先生は良いところを認めてくれていると思う生徒の割合	＊49.0% (91.9%)	＊52.0% (92.4%)	＊57.7% (94.6%)	＊+5.7% (+2.2%)
個々の実態に応じた支援方策を検討する。 出身小学校と対応等の情報共有を図る。	自分には、よいところがあると思う生徒の割合	＊37.4% (75.7%)	＊38.3% (81.4%)	＊50.3% (83.3%)	＊+12% (+1.9%)

主な取組及び成果と課題

○ 肯定的な声掛けをする等、生徒の良さに着目した関わりを勧めてきたため、生徒アンケートでは、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した割合が94.6%（前年度比＋2.2）、「困ったことがあれば、学校の先生に相談できる」と回答した割合が82.8%（前年度比＋3.9）となり、教師との関係が良好であることがわかった。また「自分には、よいところがあると思う」と回答した割合が83.3%（前年度比＋1.9）という結果より、生徒の自己肯定感向上が見られた。
○ 欠席が続き出したタイミングでサポートルームにつなぐことで、長期欠席にならず通学が可能となった生徒もいた。
○ 毎週実施する教育相談部会で、長期欠席や不登校改善に向けた支援策を検討、確認した。
○ 小学校時の家庭環境の状況の情報を得ることで、中学校に入学後も支援の方法を検討し、校区に配置されたSCに繋げることができた。
○ 小学校に兄弟姉妹がいる生徒に関し、小学校と連携し、家庭環境の情報を交換した。また小中合同ケース会議を開催し、支援策を検討した。校区教育相談部会では、小学校と連携し、家庭への支援方針を検討した。

■長期欠席生徒の割合は、１２月末時点で16.8%となった。
■長期欠席生徒の理由が病気やその他理由を背景とする生徒の割合が全国のポイントよりも高い実態にあり、医療や福祉分野との連携がより一層求められる。
■長期会うことができない生徒への支援方法として、校区配置されているSC、SSW連携を生かした相談体制や家庭支援を実施する必要がある。
■生徒アンケートより「クラスでは、安心して学ぶことができる」と回答した割合が87.1%（前年度比ー0.1）に留まっているため、生徒同士の関係を繋ぐためにSSTなどの取り組みが必要と思われる。

学校関係者評価

・一人ひとり理由が違うであろうから、粘り強く対話を行っていくしかない。
・サポートルームに通学できる生徒が増えていることはよい環境がつくられているからだと思う。
家から出られない生徒に対しては、早急に関係機関につなげるようにしたほうが良いと思う。
・生徒と教師の関係についてはある程度良好ではあるが、依然として長期欠席や不登校の生徒の割合は減少していない状況である。さらに実態に応じた登校支援について努力をお願いしたい。

今後の改善点

長期欠席生徒減少のためのサポートルームの効果的な運用、通級指導教室の利用を来年度も継続していく。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、医療、行政の関係機関とも連絡を密にし、不登校の状況の改善を図っていく。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　　)内の数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
人権教育の推進	いじめの問題や人権問題について教職員の情報共有を迅速で確実に行う。 相談窓口の定期的な周知や、相談体制の機能強化を図る。	クラスで安心して学ぶことができている生徒の割合	＊50.7% (88.9%)	＊46.8% (87.8%)	＊50.7% (87.2%)	＊+3.9% (-0.6%)
	人権教育カリキュラムに基づく系統的な人権学習を実施する。 いじめの問題に関する生徒会の取組を行う。	クラスで人に対する思いやりが大切にされていると捉える生徒の割合	＊39.0% (85.2%)	＊35.8% (82.5%)	＊44.5% (83.2%)	＊+8.7% (+0.7%)

主な取組及び成果と課題

○１年生で人権センターへの訪問をするなど、３年間を見据えた人権教育カリキュラムに基づき人権学習を実施した。
○ 保護者へのアンケートで、「学校はいじめや暴力などの問題が起きたとき適切に対応している」と回答した割合は86.4%で、前年度に比べ1.4ポイント上昇した。
○学校いじめ問題協議会を毎学期１回以上開催し、いじめアンケートの状況や学校のいじめの問題への取組状況や対応方針等について協議した。

■ 生徒へのアンケートで、「学校に行きたくないと思うことがある」生徒の割合は56.4%で年々上昇傾向にあり、昨年度より6.2%上回ることとなった。
■ 人権課題について教職員の資質向上を図る研修を実施し、人権学習の充実や学校全体で継続的に人権感覚の向上に取り組んでいく必要がある。
■ 人権ネットワークに参加する生徒が年々減少している状況の改善を検討する必要がある。
■ 学校全体でぬくたいフェスタの意義や取組を浸透させていく必要がある。

学校関係者評価

・先生方は常日頃からアンテナを高くし、些細なことも見逃さないことが大切である。それに加え、子どもと何でも話せる雰囲気作りも必要である。
・クラスで安心して学ぶことができている生徒の割合、及びクラスで人に対する思いやりが大切にされていると捉える生徒の割合が前年度に比べ増加しており、評価するところである。一番大切な心の問題であるので、さらに努力をお願いしたい。

今後の改善点

来年度も人権教育の教職員研修を通して、人権教育に関する知識や指導方法の向上に努める。また、人権教育の視点から各教科、道徳、学級活動、特別活動などを通して、基本的な仲間づくりに取り組んでいく。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ 数値（%）は、４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
特別支援教育の充実	特別支援教育コーディネーターを要とした支援方策の連絡調整機能の充実強化を図る。 特別支援学級担任、協力学級担任、特別支援教育コーディネーター、介助員等との緊密な情報共有を行い生徒理解を深める。	特に配慮を要する生徒への組織的工夫改善への教師の割合	91.9%	96.2%	95.4%	0.8%
	保護者に学習や生活場面での伸びや進歩についてこまめに伝える。 保護者の不安や願いを把握する機会を設定する。	学校は学校での子どもの様子を保護者にわかりやすく伝えていると捉える保護者の割合	73.2%	75.2%	75.2%	0%

主な取組及び成果と課題

○ 校内通級指導教室「きらっとルーム神戸」による個別の生徒支援やソーシャルスキルトレーニングを実施する時間を設定した。
○ 特別支援教育推進委員会を毎週開催し、個別の支援を必要とする生徒の情報交換を密に行い、支援のあり方を話し合う機会を設けた。
○ 定期的に特別支援学級担任間の情報交換会を実施し、生徒理解や指導上の課題等について把握する機会を設けた。
○ 校区小学校の特別支援教育コーディネーターとの連絡会を開催し、校区での早期支援や中学校卒業後の進路選択について共通理解を図った。
○ 校区保・幼・小・中の特別支援教育コーディネーターで事例検討や実践報告を行い、校種を越えて連携を図った。
○ 定期的に支援会議を開催し、生徒の保護者からの要望を取り入れながら支援方法を検討する機会を設けた。

■ 教師が、特別支援教育や発達課題に適切に対応するための指導力や資質向上を図るための研修を計画する必要がある。
■ すずかっこファイル・すずっこファイルの活用促進や発達課題への対応を充実させるための組織体制を検討する必要がある。
■ 様々な支援を必要とする生徒についての特性理解や個別支援等について検討したり、共通理解したりする機会を設けるなど、一人ひとりの生徒に応じた支援や生徒理解を充実させる必要がある。
■ 早期からの発達支援を充実させるとともに小学校教員と中学校での特別支援教育について、継続的に理解を深める機会を設けることが必要である。

学校関係者評価

・小中連携があまりなされていないように思う。今後より小中連携を進めてほしい。
・すずっこファイルなどを活用し、充実した中学校生活を送り、その後の生活に途切れのない支援になることを願う。
・様々な会議、支援策に取り組まれており評価するところである。さらに保護者の不安や願いを把握し、理解を深めていただきたい。

今後の改善点

教師にとって、特別支援教育が教育の原点であることを再確認し、取組を進めていく。特に一人ひとりの生徒にかかわる情報を大切にし、すずっこファイルを活用し、教師間での共有、意思疎通を今まで以上に行っていく。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
教職員の総勤務時間の縮減	定時退校日の主体的設定に取り組む。 部活動指針に基づき部活動活動時間及び休養日を遵守する。	一人あたりの月の平均時間外労働時間	19.0 時間	17.6 時間 （12月末時点）	21.9 時間 （12月末時点）	+4.3時間
	毎月の教職員の勤務実態を提示し、働き方改革への意識向上を図る。 毎月１時間以上の休暇取得を推奨する。	一人あたりの年平均休暇取得日数	21.8日	17.0日 （12月末時点）	12.3日 （12月末時点）	-4.7日

主な取組及び成果と課題

○ 毎月定期的に各月の勤務実態について教職員に周知し、総勤務時間縮減に向けた意識向上を図った。また、昨年度に引き続き研修主任と学力向上担当とを分け、業務の分散化を図った。
○ 生徒の欠席連絡を、グーグルフォームを活用し実施できる仕組みをコロナ禍から継続し、利用定着を図った。

■校務分掌担当の偏り解消や業務の廃止又は見直しが不十分にとどまっていることから、特定教員への業務負担が解消できていない。
■ 休暇取得促進に向け、長期休業中の休暇取得を働きかけるなどしたが、休暇取得日数は横ばいである。
■ 会議時間の短縮がなかなか進んでいない実態があり、他の会議等との重複内容の廃止や説明時間の短縮などをさらに意識化する必要がある。
■ 時間外勤務時間が月45時間超及び年間360時間超の教職員が少数いる。
■ 教職員の実質的な勤務状況に一層留意し、学校行事の集中を分散させ、勤務実態の的確な把握を行っていく必要がある。

学校関係者評価

・私自身も企業勤務の際、定時退勤等を行っていた。規則等を決め遵守することが大切である。
・教員も人間です。長期休職にならないような働き方を見直し、生徒にとっても、教師にとっても過ごしやすい学校にしてほしい。
・全国や鈴鹿市の総勤務時間の平均値を知りたい。

今後の改善点

校務の偏りを解消し、会議時間を縮減、他の会議との重複を減らす。効果的な業務推進を検討する。引き続き毎月、定時退校日を設定し、時間外勤務縮減を図り、部活動指針に基づいた部活動を運営していく。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□　数値は４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	Ｒ４実績	Ｒ５実績	Ｒ６実績	前年度比
学校と地域との連携	学校運営協議会委員や保護者・地域への積極的な情報発信を行う。 校区小中学校連携各部会での具体的な取組を実施する。	通信やHPなどで、情報を家庭へ積極的に提供していると捉える保護者の割合	92.9%	90.4%	87.7%	-2.7%
	家庭学習定着に向けた学校運営協議会での協議を行う。 学校支援ボランティアの活用を検討する。	教育方針をわかりやすく伝えているとする保護者の割合	73.8%	74.4%	73.9%	-0.5%

主な取組及び成果と課題

○ 昨年度と同様に特別支援教育への見識や保護者の立場にある方、地域づくり協議会との連携や教育行政等の経験豊富な方に引き続き委員になっていただき、学校運営協議会の機能継続を行った。
○ 学校運営協議会委員の方に学校教育活動の状況をよく理解いただいた上で熟議いただくことを考え、学校運営協議会委員の授業参観や引き渡し訓練等を実施した。
○ 校区学校運営協議会全体会を開催し、教育委員会の先生を招聘し「非認知能力の育成」について講演を行い、地域、学校、保護者の立場で共通理解を深めた。
○ 学校運営協議会委員へのアンケートでは、協議の活性化、委員の学校訪問、教育課題の協議などの項目で、昨年度よりも肯定的評価が得られた。

■ 学校ホームページ等での情報発信の利点もあるが、一方で個人情報の流出を防ぐ観点も重視されつつある。そのためか保護者アンケートでは、昨年度より2.7ポイント減少した。
■ 地域の人的・物的資源の活用に着目した教育活動を検討する必要がある。
■ 学校運営協議会委員へのアンケートでは、教育課題の改善やコミュニティ・スクールの必要認識に課題があると受け止められる。そのため、協議内容の系統性や焦点化を図るなど、教育課題改善への具体的協議として発展を図り、学校運営協議会の機能的で実効性ある活動を目指す必要がある。
■ 校区学校運営協議会全体会での意見交換を反映させ、校区として連携協力して取り組める具体的な動きを検討する必要がある。
■ 校区幼小中連携による教育活動を進めるため、継続した定期的な部会開催を通じ、幼小中の教育活動への共通理解を深めていく必要がある。

学校関係者評価

・定年退職年齢引き上げにより、学校ボランティアの確保が困難になっている。何か工夫をし、ボランティアを増やしたい。
・学校運営協議会委員が参加できる授業参観があると、生徒の様子がよりわかると思う。
・学校の状況などを、できるだけ早くわかりやすく保護者や地域の方々へ情報発信していただきたい。

今後の改善点

今年度も災害時を想定した保護者への生徒引き渡し訓練を、小学校（1校）、学校運営協議会委員、地区市民センターとも連携し行う（2年目）。学校を核とした地域との連携例としていきたい。

令和6年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□　数値は４団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R６ １学期	R６ ２学期	前学期比
非認知能力の育成	生徒一人ひとりが安心して学べる学年・学級集団の育成	友達と互いに助け合いながら活動できる。	93.4%	95.3%	+1.9%
	学校行事や体験活動の充実により達成感・成就感の醸成	わたしは途中でなげださず、最後までやりとげる。	67.9%	74.1%	+6.2%
	非認知能力を高める研修を行う。	非認知能力を高める研修を年間１回以上実施する。	１回	１回	
		生徒への校内アンケートを年３回以上実施する。	１回	１回	

主な取組及び成果と課題

○R6年度の全国学力学習調査の生徒質問紙の結果、「わからないことや、詳しく知りたいことがあったときに、自分に学び方を考え工夫することができていますか」（やり抜く力）が84%（全国比+5.4%）、「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について家の人と約束したことを守っていますか」（自制心）が78.6%（全国比+6.4%）、「自分にはよいところがあると思う」（自己肯定感）が88.7%（全国比+5.4%）、「人が困っているときは進んで助けている」（社会性）が93.3%（全国比+3.2%）の項目で全国と比べて高かった。
○１学期の校内研修で、教育委員会より講師を招聘し、非認知能力の研修を行い確認した。研修で学んだことを日々の実践、学校行事等で活かすよう取り組んだ。
○神戸中学校区の学校運営協議会で、教育委員会より講師を招聘し、研修を行った。地域や保護者の関わりが大切であることを確認した。
○非認知能力の工夫を行うため、天栄中学校の取組を研修部会を通して交流を行った。その１つとしてバトンリレーなどの取組を全校生徒で行うことができた。また、中学校だけで交流内容を広めるだけでなく、校区幼小中連携の研修で中学校で学んできた内容や行っている内容を伝えた。

■校内アンケートの結果、３学年を通して「誘惑に負けない」の項目で１学期47.1%、２学期42.7%が否定的な回答であった。家庭と連携し、規範意識を高めるような取組を考えていく必要がある。（例えば、メディアコントロール習慣をテスト週間に行う等）
■本校の校内研修テーマがまさに非認知能力の育成であり、ある意味先取りして取り組みを行っているため、今後これまで以上に、より具体的に目標設定を行っていく必要がある。

学校関係者評価

・今年度初めて「非認知能力」ということばに出会ったが、今まで自分の取り組んできたことと同じであった。毎日子どもと接していくこと、子どもを理解していくことが大切である。
・体育祭を参観した。生徒が自分たちで協議を組み立てたのではないかと感じさせられる場面を見た。また生徒が生き生きと輝いていた。非認知能力の教育が生かされているのを感じた。
・非認知能力の育成については、保護者の方への研修も必要である。

今後の改善点

生徒会を中心とした生徒主体の活動を増やすとともに、日々の活動を通して、生徒自身の成長や良さに気づけるようにする。また、教職員は非認知能力育成の視点をもち、教育活動に取り組んでいく。